様式第２号

平成２８年度　　独 創 的 研 究 助 成 費 実 績 報 告 書

平成２９年３月３１日

<table>
<tr><td>申　請　者</td><td>学科名</td><td colspan="2">保健福祉学科</td><td>職 名</td><td>教授</td><td>氏 名</td><td>吉永　早苗</td></tr>
<tr><td>調査研究課題</td><td colspan="7">サウンドエデュケーション（音感受教育）が大学生の聴力および音楽聴取に及ぼす影響について</td></tr>
<tr><td rowspan="3">調査研究組織</td><td colspan="2">氏　　名</td><td colspan="2">所属・職</td><td colspan="2">専門分野</td><td colspan="2">役割分担</td></tr>
<tr><td>代表</td><td>吉永早苗</td><td colspan="2">保健福祉学部・教授</td><td colspan="2">音感受教育・音楽教育</td><td colspan="2">研究の総括、音感受研究からのアプローチ、調査の実施</td></tr>
<tr><td>分担者</td><td>澤田陽一</td><td colspan="2">保健福祉学部・助教</td><td colspan="2">実験心理学・認知神経科学・障害科学</td><td colspan="2">調査の方法・内容に関する検討と分析、認知心理学からのアプローチ</td></tr>
<tr><td>調査研究実績の概要</td><td colspan="7">１．目的
本研究は、サウンドエデュケーション（環境音への感受性を高めること）が、大学生の聴力及び感性に与える影響を明らかにすることを目的とする。サウンドエディケーションとは、カナダの音楽教育研究者であるマリー・シェーファーによって提唱されたサウンドスケープの理念に基づく、よく「聴くこと」を目的とした教育方法である。聴く対象は、我々を取り巻く環境の音である。本研究では、サウンドエデュケーションの前後に聴力測定と音楽認知にかかわる調査を行い、そのデータ分析を通して、環境の音をよく「聴く」経験が聴力および音楽の感受にもたらす影響について検討した。

２．方法
調査は、本学の共通教育の後期開講科目である「音楽の鑑賞」の受講者を対象者とし、調査内容の説明と協力依頼の後、以下の手順で行った。
①　刺激音楽の聴取とレポート及び質問紙調査・聴力検査（2016.9.28）
②　３回の講義（サウンドエデュケーション）及び小松正史氏による音のワークショップ
③　刺激音楽の聴取とレポート及び質問紙調査・聴力検査（2016.10.26）
音楽刺激として、ほとんどの学生にとって耳慣れない次の３曲：⑴「グレゴリア聖歌」より３曲、⑵J.ケージ作曲「Solo For Cello」、⑶武満徹作曲「November Steps」を選択し、⑴～⑶の順に教室のスピーカーから流し、1曲ごとに、感想（気づきや印象）の記述を求めた。質問紙調査として、初回に自己効力感(日本語版General Self-Efficacy Scale）パーソナリティ(日本語版Ten Item Personality Inventory)、音楽刺激聴取回には気分尺度(日本語版PANAS)を測定し、その変化を確認した。
３回の講義では、サウンドエデュケーションとして、「音の質感を聴く」、「音を五感で捉える」といった内容の講義と、一日を音で振り返る「１週間の音日記」の課題、及び、夜会に参加した人々の姿や性格を音で描写したプーランク作曲「ナゼルの夜」を聴取してそのタイトルを選択する課題を行った。小松氏のワークショップでは、サウンドウォークを含む「音育」が行われた。</td></tr>
</table>

調査研究実績の概要

３．仮説

本研究では次の二つの仮説の実証を目指した。

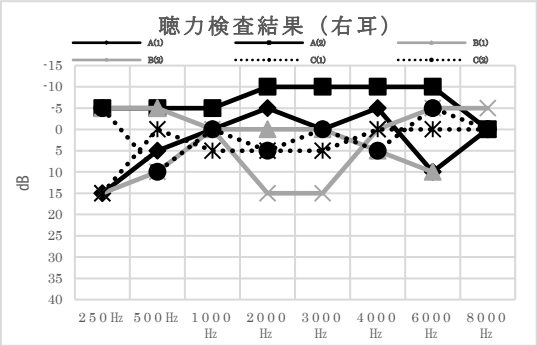
⑴サウンドエデュケーションにおける「集中して環境の音を聴く」体験は、学生の聴力を高める。

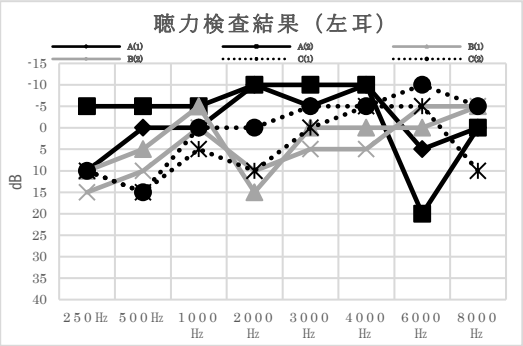
⑵サウンドエデュケーションの経験により、音楽そのものに対する聴き方が変容すると共に、音楽から感受するイメージが多様になり感想の内容が豊かになる。

４．結果と考察

⑴サウンドエデュケーションの聴力への影響

聴力検査は初回の講義後に協力者を募り実施したが、連続して協力の得られた学生は３名だけであった。検査の結果は下図のようになり、3名のうちの2名（A,C）に、ほとんどの周波数において5～20ｄＢの聴力レベルの上昇が確認され、仮説⑴は支持されたと言える。聴力の上昇が少なかったBは、サウンドエデュケーション後から聴力検査までの期間が他の２名に比べて長く空いた学生である。結果より、サウンドエデュケーションの体験による「聴く」ことに対する意識の向上が、より微細な音をとらえることにつながったのではないかと考えられる。





⑵サウンドエデュケーションの音楽聴取への影響

サウンドエデュケーションの前後における、3曲の刺激音楽聴取に対する学生の感想には、明らかに記述量の増加が見られた。そのため、記述に含まれる「形容詞」「副詞」「比喩」「嗜好（感情）」の記述をそれぞれ１点とし、聴講生の大学院生が感想を点数化した。1回目の記述と2回目の記述の点数に関し、各曲についてt検定を行った(n=77)ところ、全ての曲において有意差（$p<0.01$）が確認され、サウンドエデュケーションの体験が、学生の音楽聴取におけるイメージが多様になり記述が豊かになるという仮説⑵が支持された。また、自己効力感と気づきの記述量に相関は認められなかったが、パーソナリティの協調性と1回目第3曲（$r=0.21, p=0.063$）、開放性と2回目第2曲($r=0.27, p=0.017$)にそれぞれ正の相関が見出された。第3曲は、尺八と箏の和楽器と管弦楽とのコラボ作品であり、協調性の高い学生は初回から想像力を持ってその作品を聴いていたと言える。なお第2曲の作曲者であるJ.ケージは、サウンドエデュケーションの開発者であるマリー・シェーファーに多大な影響を与えた人物である。その作品に対し、サウンドエデュケーション後に開放性の高い学生の記述量が増加していることは、興味深い。

成果資料目録	2017年度日本音楽学習学会に於いて発表、その後同学会誌に投稿の予定である。